

台湾情報誌

Jun
2022
8

Vol.977

交流

香港住民の政治参加から見る台湾



「大橋光夫・日本台湾交流協会会長(右)、蘇嘉全・新台湾日本関係協会会長(左)」

公益財団法人 日本台湾交流協会
Japan-Taiwan Exchange Association

2022
vol.977

8

目次

時空を超えて香港の闘いとらえる～台湾へのインプリケーション～ 阿古智子	1
台南市との友好協定締結5周年を振り返って 山形市国際交流センター	6
日本語パートナーズ台湾第6期の活動について パートナーズ6期（上西奈瑠香、村井淳一）	17
日系スタートアップの台湾進出と全力支援！ ～「Grow up with Taiwan Program」のご案内～	22
日本台湾交流協会事業月間報告（7月実施分）	24

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人日本台湾交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人日本台湾交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

日本台湾交流協会について

公益財団法人日本台湾交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も大宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

表紙写真

2022年6月28日、大橋光夫・日本台湾交流協会会長は、訪日中の蘇嘉全・新台湾日本関係協会会長と面会しました。新型コロナウイルス感染症の拡大以降、両協会会長が対面形式で交流するのは今回が初めてとなりました。

面会では、両協会会長が共に力を合わせて日台関係を促進していきたいとの決意を示されました。

時空を超えて香港の闘いをとらえる ～台湾へのインプリケーション～

東京大学大学院総合文化研究科教授 阿古 智子

日本では7月中旬から、『乱世備忘 僕らの雨傘運動』を撮った陳梓桓（チャン・ジーウン）が監督を務める映画『憂鬱之島』が公開されている。この映画はクラウドファンディングによっても資金を集め、香港と日本の共同制作という形で完成した。

過去から現在へ、現在から未来へ。『憂鬱之島』は時空を超えて香港の闘いをとらえている。歴史的場面を再現しながら現在の香港を描き、未来を展望する。演じているのは素人で、彼ら・彼女らは自らの経験や想いを語っている。現在20代の香港の若者たちは一人二役で、歴史上のシーンにも登場する。

香港人の多くは中国大陸から命からがら逃れてきた。経済政策の失敗や内乱が相次いだ中国では、1950年代の大躍進政策、1960年代から1970年代の文化大革命によって甚大な数の餓死者や死者が出た。生活の困窮や迫害から逃れるため、海を渡って香港に逃げ込んだ者は、50年以上経った香港で自由と民主を求める若者たちと共にデモに参加する。天安門広場で戦車と銃弾、国民に銃を向ける軍を目の当たりにした香港人は2019年、「香港人による香港」をつくろうとする若者たちが警察に暴行されるのを目撃し、30年前の記憶がフラッシュバックする。

香港人が模索してきた脱植民地主義

英国統治時代、「政治には関心を示さない」と見られていた香港人だが、実際は権力に対する抵抗を続けていた。広東省と連携して行なわれた反英運動「省港ストライキ」（1925-1926）、九龍暴動（1956）、スターフェリー値上げ反対暴動（1966）、

香港暴動（1967）などが起こり、1970年代には中文公用語化要求運動、尖閣諸島の中国による領有を主張する「保釣運動」などの学生運動が行なわれた。造花工場の労働争議が香港政庁批判の政治運動と化し、この背後で香港の共産党組織・広東省の紅衛兵組織が支援し、暴動化した1967年の香港暴動では、政府公表で死者51人、負傷848人、逮捕者5000人、処理された時限爆弾7340発、秘密裡に追放されたものが多数に上り、2077人が実刑を科せられた。46%が不法集会などの微罪だったが、武器所持者の同伴者に平均三年の罪が科せられるなど、微罪でも厳罰の傾向があったという。その根拠となったのが1922年に制定された「緊急状況規則条例（緊急法）」だった。

緊急法によって、政庁には長期の拘禁と香港からの追放の権限が与えられ、治安を理由にすれば裁判なしで1年の拘留も可能とされた。植民地統治にはこうした非民主的で強権的な側面があった。しかし一方で、経済活動は自由で、文化・芸術活動が盛んに行なわれ、調査報道からゴシップに至るまで幅広いメディアが発達し、多元的な市民社会が発展していった。

2010年代は英国の漸進的な民主化推進の影響もあり、「民主回帰」論（民主的な体制を持って祖国に復帰する）が出現し、香港市民の価値観が急速に変化した。香港に居るのは英国と結託する買弁か、政治に関わる余裕も意思も能力もない難民、あるいは、地元・香港よりも中国へのナショナリズムを主張する愛国者たちと揶揄された時代を経て、ここ十年来は、香港人としての主体性「本土意識」を持つ若者たちも誕生し、香港の民主化運動が盛り上がりを見せるようになったのである。

左と右に分裂する民主派

民主化を模索するグループは新旧さまざまな勢力が入り混じっており、決して一枚岩ではなかった。民主派は、2017年には行政長官普通選挙・立法会全面普通選挙を認めるとしていた中央政府の決定に対し、香港政府は小幅な改革案を出した。しかし、公民党などの急進派がこれに断固として反対したのに対し、民主党に代表される穏健派は中央政府との交渉を選択した。その後、中央政府や香港政府に対して強い不信感を持つ若者の間で「本土派」と称される新勢力への支持が高まり、雨傘運動の際には庶民の町・旺角に「勇武抗争」を掲げる者が集結したのに対して、政府庁舎前の金鐘地区ではリベラル団体やその支持者が「平和裡、理性的、非暴力」の方針にこだわった。

さらに、香港の利益が最優先だと訴える本土派がある種の「香港ナショナリズム」の主張を展開したのに対し、1989年の天安門事件をきっかけに成長した民主派は普遍的な人権・民主の観点から中国の民主化を求め、尖閣諸島問題で日本に抗議するなど、中国ナショナリズムの色彩を帯びる活動も展開した。こうした旧勢力の民主派を「左膠」（凝り固まった左翼）で、「離地」（地を離れている＝一般大衆の価値観からかけ離れている）といった言葉で批判する本土派の一部（右翼本土派）は、中国大陸からの移民や観光客をあからさまに差別し、「香港民族」という概念まで提示して香港の独立を主張するようになる。反エリート主義、反知性主義の高まりが米国でトランプ大統領を誕生させたと言われるが、それより少し早い時期に香港でもリベラル左派への抵抗から排他的な民族主義が台頭した。

分裂を避ける戦略で批判がタブーに

労働問題研究者で活動家の區龍宇は『香港の反乱2019』（柘植書房新社、2021年）で、「中立的な観察者でない」立ち位置から雨傘運動から逃亡犯条例改正案反対デモにいたる民主化運動の多面的な性格をあぶり出そうとした。區龍宇は、同じ民主化を目指す人々が暴力の行使、香港政府、中央政府、中国大陸の人々への態度、行政長官・立法

会議員の普通選挙などに対する意見の相違で摩擦を生じさせ、時に激しくぶつかる状況を指摘した。これについては、日本における香港研究の第一人者である倉田徹も『香港政治危機』（東京大学出版会、2021年）で同様の見方を示している。

區龍宇は2019年のデモで「以武制暴（武力によって暴力を止める）」というスローガンの下で活動を展開した勇武派と2014年の右翼本土派には強い連続性があったが、両者は根本的な点で異なっていると述べる。すなわち、右翼本土派は雨傘運動の期間中、学生や泛民陣営（旧勢力を含む広義の民主派）を攻撃し続けたが、勇武派は最初から「和勇一家」（非暴力民主主義者と勇武派は一つの家族である）という名の下に非暴力のデモ参加者との連帯を追求した。

勇武派は警察の暴力に抵抗するため「前線」と呼ばれる人々と、武器の材料の提供、路上バリケードの設置、応急処置などを行なう後方支援を担当する人々に分かれて活動した。彼らはそれぞれの役割を軍事用語で表現したり、漫画やビデオゲームのキャラクターを取り入れたりした。例えば、哨兵（見張り番：最前線にいる人々のためにネットと現場で警察を監視する人々）、軍火商（武器商人：火炎瓶を作ったり運んだりする人々）、火魔法師（火の魔法使い：火炎瓶を投げる人々）、文宣兵（デザイナー：宣伝文句や絵をデザインする人々）など。

こうして見ると、勇武派はよく組織化されていたかのようだが、區龍宇は彼らが自発性を擁護し、命令や階級をとまなう組織を半ば拒否していたと見ている。議論は常にオンラインで行ない、決定に拘束力はなく、規律を課すことは不可能だった。合意にいたらず仲間割れした場合は、それぞれが自らの行動を実行した。役割は自ら選ぶため、現場で必要とされる任務をうまく調整できないこともあった。

若者たちはさまざまな比喻を用いて自らの意見を表現した。例えば、「水のようになれ」（機動的な抗議行動は占拠よりも優れている）、「ステージはいらない」（指導者、代表者、公開討論などは必要ない）。非暴力支持者と勇武派の間で意見の相違が生じてても寛容でなければならないという観

点から「兄弟よ、それぞれ努力して山に登ろう」。このような比喩を使ったアプローチによって、人々は抗議活動に参加しやすくなったが、議論が曖昧になり、批判することは何でもタブーとされてしまった。民主的討議も集団的な責任も不十分で、調整の欠如が最も過激な者に状況の統制を許すこともあった。

仲間割れする勇武派

産経新聞記者として香港報道に従事し、『香港人は本当に敗れたのか』を上梓した藤本欣也は、複雑な心情を抱き始めた勇武派の若者たちをインタビューしている。香港理工大学で繰り広げられた警察との攻防戦の中にいた女性は、「どうしたら香港の人々が目覚めてくれるのか、一緒に戦ってくれるのか」分からなくなり、爆弾を体に巻き付けて「カミカゼ」をしようと考えたが、「あなたが死んだところで誰も目覚めやしない」と仲間の母親に諭された。さらに彼女は、反政府デモの支援者と称する者の不実をなじると、仲間からも敵視されるようになり、自分も他の仲間のように『私了』されてしまうかも（私刑を下される）と懸念するようになった。平凡な会社員だった彼女は「前線で苦しむ学生たちを守ろう」と前線に立ったのだ。しかし、勇武派も互いに疑いを向けて仲間割れしていった。

家族や仕事、友人との関わりなど、さまざまなしがらみがあって抗議活動の最前線には立てないが、何らかの役割を果たそうと「罪滅ぼしの気持ち」で活動する者もいる。藤本が話を聞いた男性は、昼間は金融街・中環^{セントラル}の外資系金融機関で働き、夜間にデモ現場などに車で駆けつけては、警察に追われる若者たちを安全な場所まで運んだ。彼のような人たちは勇武派の負傷や逮捕を心配する一方で、「がんばれ、頼んだよ」と声をかけ、若者たちを拍手で前線に送り出す。しかし、命、友、前途、学業、愛情は勇武派にとってもしがらみではないのか。若者たちは人々に鼓舞されることを苦痛と感じていた。

固定化する階層間格差

香港経済は世界で最も自由で活気があると言わ

れてきたが、香港政府は人々に対して公正・公平を十分に保障してきたのだろうか。一握りの開発業者が支配する不動産市場では、住宅の供給が減って価格が高騰したが、政府は公営住宅の建設計画を積極的には進めなかった。さらに、政府が公共支出を最低限に抑えているため、老朽化する建物のメンテナンスにおいて深刻な問題が生じている。グッドスタットは、先進的な都市を適切に運営する上で必要不可欠な公共サービスを提供してこなかった歴代の行政長官と政府高官の政策は誤りであり、行政の欠陥の代償は大きいと強調する（レオF・グッドスタット『香港失政の軌跡—市場原理妄信が招いた社会の歪み』白桃書房、2021年）。

大学入学定員数を厳しく制限し、エリート主義的な特徴を維持してきた香港の高等教育も貧富の格差の拡大に拍車をかけた。大学に入学できるほどの高い学力のある相当数の学生が門前払いされ、副学士号を授与する民間部門に振り分けられている。高い授業料にもかかわらず、副学士号は公務員や公共サービスの募集資格を十分に満たさず、キャリアに役に立たないと評された。

高等教育制度の破綻や貧富の格差の拡大にもかかわらず、若者たちの抗議活動は社会的・経済的な問題ではなく、香港の自治権と普通選挙権をめぐる起こった。社会階層が固定化する香港社会において、既得権益層の上層階級は民主主義を支持せず、下層階級は「高尚で甘い香りがする」民主主義や自由とは無縁だ。民主化運動の挫折の背景にはこのような階層間の乖離が存在する。

香港は常に中国との関係性において自己を捉えざるを得なかった。伝統的な「左対右」でなく「民主主義対専制政治」の二分法にとらわれすぎた結果、社会が分裂し、民主主義を育てる土壌を豊かにできなかったのではないか。

香港は、植民地構造から脱却できないまま民主化を模索し、挫折したといえるのかもしれない。「レッセフェール」という自由放任の経済政策の下に「積極的不干渉主義」を貫いてきた香港政府は、民主主義の発展のために不可欠な公共領域の形成を阻害してきた。

現在の中国は表向き社会主義国だが、実際には

資本主義国以上に弱肉強食の経済活動が展開し、貧富の格差が驚異的な水準にまで拡大している。国家安全維持法の施行によって中国の介入が進む香港は、今後さらに新たな植民地主義に苦しまなければならないのではないかと。香港が「中国化」することは避けられず、香港の人々が主体を取り戻し、自らのつくりたい香港をつくることは不可能なのか。

台湾へのインプリケーション

筆者は、アメリカのハーバード大学アッシュエンターで上級研究員を務める香港出身の郭榮鏗（デニス・クウォック）氏と交流を深めている。郭氏は香港で弁護士、法曹界選出の立法會議員として活躍していたが、立法會議員選挙の立候補資格を剥奪された後、2020年11月に家族とともに香港を離れた。香港に居続けていれば、彼も今頃、共に活動していた弁護士や議員の仲間たちのように塙の向こう側にいただろう。

郭氏は、中国の習近平政権を前に、台湾の位置付けを曖昧にしてきたこれまでの国際社会の戦略は通じない、国際社会は香港が得た教訓を決して無駄にしてはならないと力説する。国家安全維持法の施行で中国が直接的介入を強める香港では、一国二制度が保障するはずの「高度な自治」は事実上、画餅に帰している。

一国二制度はもともと、台湾との関係を想定して考案された。1981年に全国人民代表大会常務委員会の葉劍英委員長が発表した台湾問題に関する談話には、台湾が平和的統一に応じれば台湾の現状を尊重し、高度な自治権と軍隊の保有、経済社会制度の維持を認めるという内容が盛り込まれている。しかし、当然ながら大半の台湾人が一国二制度に反対している。その一方で、昨年10月9日の辛亥革命百十周年の記念式典で習近平国家主席は「祖国の完全な統一という歴史的任務を必ず実現する」と述べ、台湾への一国二制度の適用を目指す考えを強調した。

郭氏は、民主主義に関して合意できない分裂した社会は、権威主義とその脅威に打ち勝てないのだと語る。天安門事件当時、香港人は堅く団結して民主化運動を弾圧する中国に強く抵抗した。時

が経ち、香港社会は親中派と民主派の分断が顕著になり、本論でも見てきたように、民主派内部にも分断が生じている。さらに、貧富の差も拡大し続けた。

おわりに

冒頭で紹介した『憂鬱之島』は、香港での上映許可が出ないだろう。昨年10月、「国家安全保障上の利益に反する」と見なされた映画について、新旧を問わず上映許可を取り消す権限を香港政府政務官に与える条例が可決されたからだ。無許可での上映は3年以下の禁錮刑と最高100万香港ドルの罰金の対象となる。

映画上映直前の渋谷Loft 9での記念イベントにオンラインで参加した陳梓桓（チャン・ジューン）監督は、「香港で上映できないことは残念ですが、今月私は『少年たちの時代革命』の監督・林森、『時代革命』の監督・周冠威ら30人以上の香港の映画製作者と共に「香港自由映画宣言の署名人に加わったのです」と話した。有限会社 Phone Made Good Filmの任俠、安娜、周澄、陳力行が発起人となった宣言は、このような書き出しで始まる。

「香港はいったい何なのか、今ほどそれを知りたいと思ったことは、長い歴史の中でもなかったのではないかと。目下の時代の趨勢は、我々にこう言い渡している。香港なんてそんなに重要ではない、崇高で権威的な国家の付属物でしかないし、香港には自らの、真の独立した個性などあり得ないのだと。しかし、我々はそうではないことを知っている。だから、異議を唱えて反抗する。創作する。幾度も奇跡は生じ、出てきた芽は大きく育ってきた。過去も現在も、香港はさまざまな姿を見せてきたが、それによって我々が劣等感や不安感を持つことはない」

香港の人たちが身を挺して示してきたことを、我々はどのように受け止められるのか。中国という世界最大の権威主義国家に対して、我々が決して譲ってはならないものは何か。

何よりも大切なのは、自らの民主主義の基盤を固めることであろう。毎回選挙のたびに、投票率が伸び悩む状態が続く日本とは異なり、台湾の

人々は政治参加に積極的だ。しかし、台湾内部の政策運営においてはさまざまな課題があり、国際政治の緊迫や中国からの圧力もあり、社会の分断が顕著になっている。差し迫った問題に迅速に対応し、確実に効果があげられるように、国民も政治家も内部で激しく攻撃し合うのではなく、異なる意見を尊重して熟議を重ね、コンセンサスに向かっていくことが肝要ではないか。

国家安全維持法の施行によって香港を激変させた中国政府は、より直接的に台湾に圧力をかけるようになっている。日本を含む国際社会は中国の動向に注視し、強い危機意識を持って民主主義の

制度を更新し、その価値を高めるために実践を継続しなければならない。民主主義が活力を維持し、効果を発揮するためには、その構成員が主体的に制度運営に参加することが重要だ。

市民の政治参加のあり方については、既に多くの議論が行われてきたが、経済・社会的格差が拡大する中でいかに政治的平等を保障するか、エリートや専門家と一般市民との関係をどう構築するか、政府によるガバナンスの強化と国民による主体的な参加の整合性をどのように確保するかなど、私たちが取り組むべき課題は山積みである。

台南市との友好協定締結5周年を振り返って

山形市国際交流センター

1 山形市の紹介

山形市は人口約25万人で、平成31年4月に、山形県内では唯一の中核市となりました。

観光名所としては松尾芭蕉の紀行作品「おくのほそ道」で有名な「山寺（立石寺）」、また雄大に聳え立つ蔵王連峰、その山頂付近にあるエメラルドに輝く火口湖の「御釜」、強酸性の硫黄が血行

や肌に効能の高い蔵王温泉と多岐にわたっています。

そして街なか観光として、その昔、霞に覆われて見えたことから霞ヶ城の呼び名があった山形城址は、霞城公園として市民に愛され、東大手門や本丸一文字門などを現在復元し（東大手門には現在では輸入できない台湾ヒノキの巨木が使われている）、古の姿を伝えています。旧山形県庁並び



写真：蔵王の御釜



写真：山寺 紅葉

に旧県議会議事堂は「文翔館」として整備され、映画のロケ地や、コンサート会場にも利用されています。紅葉や茶室で有名な「清風荘（もみじ公園）」、古くから盆地を流れる堰を活用し整備した「水の町屋 七日町御殿堰」、また旧市立第一小学校の建物を活用した文化施設「やまがたクリエイティブシティセンターQ1」（令和4年9月オープン予定）など、見どころも豊富なおうえ、市内中心部を100円の循環バスが走り、簡単にアクセスができ、観光に生活に大変便利です。

また、春には霞城公園東大手門の観桜会、夏は東北4大祭りの一つである花笠踊りパレード、秋には日本一の芋煮会、冬は蔵王の樹氷・スノーモンスターと、四季折々の観光が楽しめます。

食べ物も、山形牛、日本蕎麦、ラーメン、日本酒、サクランボ、ラ・フランス等々、枚挙にいとまがないほど、四季に美味しいものがそろっています。

こけし、のし梅、ふうき豆等のお土産品、また

冷やしチャンプルー、冷やしラーメン発祥の地でもあります。

豊かな自然と、歴史ある文化が今もなお息づく街です。

2 台湾・台南市との交流の始まり

山形と台湾の交流の嚆矢は、昭和39年、山形県日華親善協会の発足が挙げられます。山形生まれの故大久保伝蔵氏は元山形市長であり、戦中から戦後にかけて国政の政治家として活躍された方でした。その大久保氏により、戦後に日本が蒋介石に受けた恩を忘れないために、日本で初めての日華親善協会が設立されました。また、平成5年に台南市進出口商業同業公會と山形商工会議所が姉妹会を締結するなど、経済界を中心として交流が深められ、その交流は現在も引き続き温められています。

このような経済面での交流が素地となり、現在の佐藤孝弘山形市長が、平成28年12月に台南市を



写真：締結式（平成29年12月）

経済訪問団として訪問した際に、当時の台南市長である頼清徳氏から、山形市と台南市の交流について深化させたい旨の提案がなされました。平成29年7月下旬から8月上旬にかけて山形市から台南市に訪問団を派遣し、今後の交流のあり方や交流の分野について台南市側と協議を行い、平成29年12月6日に「山形市と台南市との友好交流促進に関する協定」を締結し、友好都市となりました。台南市からは李孟諺台南市長を代表とする9名の訪問団が来形し、山形市において締結式を行っております。

その協定では観光・経済・文化・教育・スポーツの5分野の交流が掲げられました。

3 締結後の具体的な交流について

協定の締結後すぐに行われたのは、スポーツ・教育分野である野球交流でした。平成29年12月から平成30年1月にかけて、台南市主催の野球大会「台南市巨人盃国際青少棒錦標賽」に山形市選抜チームを派遣し、交流試合等を通して交流を深めました。

またその年の夏には、台南市にお伺いした時に

対戦した台南市立金城国民中学校の生徒を招聘し、野球試合の他、山形の夏を彩る花笠まつりに参加してもらうなど、夏の山形を満喫していただく交流を行いました。そして、令和元年12月から令和2年1月にかけて、再度「台南市巨人盃国際青少棒錦標賽」に山形市のチームが参加しています。その年の夏に再び山形市への受け入れを行う予定でしたが、コロナ禍のために招聘できなくなってしまいました。ただ、コロナ禍においてもお互いに寄せ書きや動画などを送りあいながら、野球を通じた両市の友情に変わりがないことを確認しています。

また、山形と台湾との交流が盛んになったこと等を受けて、山形大学に「一般社団法人 日台政策研究所」が平成30年度に設立され、特に歴史や文化面でのセミナー等を開催されています。研究所理事長であり、山形大学の名誉教授である松尾剛次先生や、中澤信幸先生には日頃よりご指導、ご協力をいただいているところです。

4 山形市農業委員会の交流

平成30年10月～11月には、山形市農業委員会会



写真：金城国民中学のとの野球交流



写真：花笠まつりに参加する金城中生徒



写真：市民訪問団での歓待



写真：歓迎セレモニー



写真：野崎孝男氏による経済セミナー

長らの訪問団を台南市に派遣しました。台南市の農業関係団体及び農業者との交流により、農産物や農業技術の情報交換を行っています。引き続き令和元年11月にも同様に、農業委員会に於いて台南市を視察しております。

台南市の数ある魅力のうちの一つは多くの南国フルーツでしょう。マンゴーに始まり、パイナップル、ライチ、バナナ、釈迦頭等々。山形市もサクランボを始め、ラ・フランス、シャインマスカット、スイカ、モモと多くの果物が実り、お互いに古くより農業の盛んな都市です。そのような点からも両市には多くの共通点があり、農業後継者や新規就農者の育成、生産の効率化など、共通の問題・課題も多いようです。今後も引き続きそのような面での交流が盛んになる事が期待されます。

5 経済・観光面での交流

経済・観光面の交流としては、平成30年7月に当時台南市外交顧問であった野崎孝男氏を山形市に招聘し、台南市の経済・観光状況等についての

セミナーを開催しています。

そして11月には台南市旅行博や新光三越で開催される「日本商品展」の時期に合わせて、市長を団長とする経済訪問団40名を台南市に派遣し、台南市の経済状況の視察等を行ってきました。

また、日本商品展「新光三越日本展」に山形市の物産を出展し、ミス花笠によるオープニングセレモニーや山形市長自らがトップセールスを行うなど、台南市民へ効果的にPRするためプロモーション活動を行っていました。また、「大台南国際トラベルフェア」にて、仙台市と連携しプロモーション事業を実施しました（平成30年度より例年参加）。

特に令和元年度の「日本商品展」における山形市の物産の出展・プロモーション活動においては、日本酒の販売、山形の名物「どんどん焼き」というお好み焼きや、辛味噌ラーメンの出店等が台南の方々の目を引きました。



写真：市民訪問団

6 市民訪問団の派遣

協定締結当時、日本へのインバウンドとして台湾からの観光客が増加していました。東北地方においても、また山形においても多くの台湾の方が観光に訪れておりました。ただし、逆に日本からのアウトバウンドの少なさが問題とされており、ぜひ山形市民にも台湾・台南市の魅力を知っていただく必要がありました。そこで令和元年度には市長を団長とする市民訪問団を結成し、台南市を訪れる計画を立てました。折しも山形市制施行130周年ということで、記念事業の一つとして行われました。

議会への説明、チャーター便利用の検討、市民訪問団参加者の募集、現地台南市への説明や打合せ等々、目まぐるしく毎日を送ったことを思い出します。途中紆余曲折がありながらも、令和元年の11月12日から16日にかけて、37名を台南市に派遣しました。着いて先ず、台湾の暑いことに驚きました。山形市も盆地の内陸気候で、夏場蒸し暑い

思いをするのですが、7～9月くらいのものでした。台南市では12月くらいまで暑い日が続くとのことでした。

台南市においては、黄偉哲台南市長への表敬訪問を行い、台南市政府主催による歓迎晩餐会を開催していただきました。特に、台南市政府に到着したとき、台湾・台南市の旗と並んで山形市の旗が掲揚されていました。これは最大の歓迎の意を表すものとのことだそうです。多くのマスコミの方々にも迎えられ、大変歓待を受けたことを思い出します。

参加者には台南市の魅力を知ってもらうべく、観光名所等を案内するほか、台南市の新光三越における「日本商品展」での山形市物産プロモーションへの視察等を行いました。また訪問団には地元新聞の記者にも同行していただき、台南訪問記を新聞紙上において、記事を掲載していただきました。併せて、チャーター便を活用して、山形県日華親善協会・山形商工会議所からも約20名の方が同行でご参加いただきました。

参加された市民の方からは「台南の魅力を知ることができた。また訪れてみたい。」「山形の人に台南の魅力を広めたい。」などの声をいただき、概ね好評に終わることができました。

7 山形市台南市交流推進アドバイザー

山形市がここまで台南市と交流を続けてこれたことについて、大変ご尽力くださっている方がいらっしゃいます。台南市の外交顧問の野崎孝男氏です。

野崎さんは台湾のラーメンチェーン店の経営者というばかりでなく、台湾の経済界や政界に通じた方です。台南市との協定締結についても大変ご尽力をいただきました。また、山形の経済界についてもアドバイスをいただき、平成30年と令和2年に、山形の事業者に向けたセミナーの講師を務めていただきました。

そういった経緯から、山形市は令和元年10月に野崎さんに「山形市・台南市交流推進アドバイザー」に就任していただきました。以来台南市の状況ばかりでなく、台湾の状況なども広く情報をいただいています。

また、山形市で行っている売り上げ増進支援センター「Y-biz (ワイビズ)」を通じた、事業者の経営相談においても、台湾へ進出したいという希望のある山形市内の事業者に対してオンラインでアドバイスをいただきました。

加えて、野崎さんにはコロナでマスクの不足している際には布マスク2,000枚をいち早く寄贈いただきました。昨年は山形市内の子ども食堂11施設と山形県内のすべての児童養護施設に対し、台湾産のパイナップルをご寄贈いただきました。私も実際に子ども食堂に行き、南国のパイナップルを頬張り、喜ぶ子供たちの姿を拝見いたしました。

常日頃から適切なアドバイスやご協力をいただき、大変に有難く思っているところです。やはり海外との交流については現地において協力していただける方がいないと、なかなかスムーズには進まないもので、野崎さんには山形市と台南市との交流に大変にご尽力いただいております。

8 コロナにおける状況

このように交流に力を入れてきたところですが、令和2年の3月から実際の人的交流が難しくなりました。山形県で3月末、山形市内でも4月にコロナ罹患者が発生し、海外との交流は愚か、市の施設の貸し出しも一時停止しました。マスクの不足や高騰、また残念だったのは当初海外からコロナがもたらされたということで、外国人に対する偏見なども見受けられました。その後外国人ばかりではなく、山形へ帰省した山形人に対してもその目が向けられました。

そのような中で、野崎さんからマスクの寄贈をいただき、台南市長からも医療用メガネ300個とマスクガセット400枚を寄贈いただきました。山形市として感謝の気持ちを伝えるため、初めてオンラインを使ったweb会談を行い、黄偉哲台南市長らに感謝の意を表しました。

また、野球交流を行っていた金城国民中学校からは「山形加油」の寄せ書きが寄贈されました。山形市からも、当時台湾でも流行っていた『鬼滅の刃』の人形や、山形を紹介し山形の野球チームの想いを載せたパネルや、翌年にはドローンを使って山形の魅力や野球活動を映した映像を作成し、台南市立金城国民中学校に贈りました。

コロナを乗り越えて、交流が再びつながるようにと願っています。

9 5周年を迎えて

平成29年12月に協定を締結して以来、今年の12月でまる5年を迎えます。ただしコロナがまだ明けておらず、そういった状況で出来ることを考えました。

そのような中、7月に「台南フェア」を行いました。7月15日(金)～17日(日)の午前10時から午後6時まで、山形市の駅に直結する霞城セントラルという建物の1階で、開催いたしました。

台南市を紹介するパネルやパンフレット、グッズなどを展示するなか、当日訪れた方には先着でマンゴーをプレゼントしました。台南市との交流をクイズとして出題し、正解した山形市民の中から抽選で台南産マンゴーや台南市政府から送られ



写真：台南フェア オープニングセレモニー



写真：台南フェアでの提灯



写真：台南フェア

た特産品をプレゼントしました。また、SNSでの拡散を狙い、赤塚楼をパネルとした撮影スポットで撮影した方に対し、パイナップルケーキをプレゼントしました。その他、山形県日華親善協会や山形商工会議所、山形市国際交流協会、山形県立山形工業高等学校のマンゴー栽培の取り組みなどを紹介しています。

また、オープニングセレモニーにおいては、山形市と台南市とのこれまでの交流をまとめた動画の上映のほか、台湾からの留学生（1名は台南市出身）に台湾の古い歌「雨世花」や「望春風」を披露してもらいました。

また、コロナで人的交流が難しいことから、お互いの市の子供たちに書いてもらった提灯を飾りあう交流を予定しています。

元来台湾では、春節（旧正月）に「元宵節」があり、提灯を飾る風習があり、台南市では旧鄭成功祖廟において提灯を飾っていらっしゃいます。

今回祖廟に飾られていた赤い提灯と、山形市と野球交流を行っている台南市立金城国民中学校の

生徒から新たに描いてもらった提灯と、計277個の提灯が山形市に贈られ、山形駅前東西自由通路や台南フェア、山形市国際交流センターなどで展示を行っています。

また、今回飾った山形市の子供たちの提灯も終了後に台南市へ贈らせていただき、来年の春節の際に台南市で飾ってもらう予定です。展示数量は以下のとおりです。

- 台南市から送られた数

旧鄭成功祖廟（赤い提灯）	151個
台南市立金城国民中学校（白い提灯）	126個
	計277個
- 山形市内での設置予定個所

東西自由通路	160個
台南フェア・国際交流センター他	117個
	計277個

なお、台南市からの提灯のうち子供たちの描いた提灯には以下の4つのテーマがあります。

- 1 台日友好交流、日本からワクチン寄付についての感謝

-
- 2 台南の名所、グルメ、農産品など
 - 3 金城国民中学校の特徴
 - 4 山形市と台南交流について（例えば野球）
- 数々の思い思いの図柄を見ているだけで楽しく、子供たちへの感謝の気持ちに涙があふれてくるような思いがこみ上げてきます。

10 最後に

この5年間で海外情勢もいろいろな変化がありました。5年前を振り返ればまさに激動の時代に突入したという感が否めません。そういった情勢

も見守りながら、地方自治体としては市民レベルでの交流について、今後とも関係機関と連携を取りながら更なる深化に向け取り組んでいきたいと考えています。

山形市国際交流センター

〒990-8580 山形市城南町1-1-1霞城セントラル
2階

TEL：023-647-2275 FAX：023-647-2278

Mail：kouryu@city.yamagata-yamagata.lg.jp

日本語パートナーズ 台湾第6期の活動について

「日本語パートナーズ派遣事業」は、日本人ティーチングアシスタントをアジアの中学・高校等に派遣し、日本語授業のサポートや日本の文化紹介等の活動を行う事業で、台湾では独立行政法人国際交流基金から当協会が一部を受託し実施しています。

台湾では、第6期の13名が2022年2月3日から7月1日までの期間、台湾各地の高校に派遣されました。今回はその中から2名の日本語パートナーズの活動を紹介します。

コロナ禍での活動と異文化交流

上西 奈瑠香

日本語パートナーズ事業とは、今は亡き安部元首相が2013年に新しいアジア文化交流政策「文化のWA（和・環・輪）プロジェクト～知り合うアジア～」を発表し、その実現のため国際交流基金がアジアセンターを立ち上げ、発足したプログラムです。そのWAは台湾だけでなく、インドネシアやタイなど東南アジアを中心に10の国・地域に広がっています。

私は日本語パートナーズとして、今年の3月から6月末まで国立花蓮高校にいました。今回で6期となる台湾への派遣ですが、本来なら私は5期として2020年の9月に台湾に渡航するはずでした。しかし、新型コロナウイルスという未曾有の事態により、5期の派遣は中止となりました。希望者のみ6期へ振り替えられ、2021年の9月から派遣される予定でしたが、それも延期となり、今年の2月ようやく渡航が許されました。しかし、台湾に行った私たちを最初に待ち受けていたのは、14日間の隔離でした。部屋から一步も出ることが許されないため、2週間誰とも会うことなく過ごしました。そして3月1日、それぞれの派遣校へ移動し、ようやく日本語パートナーズとしての活動が開始できました。

私たちの役割は、大きく分けて3つあります。

1つ目は現地の日本語教師のアシスタントとして授業のサポートをすること、2つ目は日本文化の紹介をして、現地の人と交流をすること、3つ目は台湾の文化や習慣を理解し、日本人に広めることです。



最初の授業で自己紹介をしているところ

私は実際に台湾人の日本語の先生のアシスタントとして、授業に参加していました。先生が中国語で文法の説明などを行っている間、私は机間巡視をしたり、プリントの文を音読したりしました。そして、ときどき授業時間をもらい、私が準備した日本文化紹介をさせてもらいました。また、昼休みや放課後を利用して、日本語コーナーを開催したり、先生達向けの日本語レッスンをしたりもしました。私は台湾に来たことが何度かありますが、それでも毎日いろいろな発見がありました。面白いこと、びっくりしたこと、そして私が行っている活動などを、毎日SNSに投稿して、日本にいる家族や友人に見てもらっていました。

活動を始めて1か月ほどたった頃、台湾の新型コロナウイルス感染状況がどんどん悪化していきました。それに伴い、学校行事も延期や中止を余儀なくされてしまいました。台湾の行事に積極的に参加することが、私の目標の一つでもあったので、とても残念でした。

5月ごろには、多くの学校で対面授業ができなくなってしまう、日本語パートナーズとしての活動にも影響が出ました。花蓮高校でも、オンライン授業が何週間か続きました。その間、画面上でしか生徒たちと会えないことに空虚感を抱きました。そんな私を気遣ってくれたのか、ある先生が昼食に誘ってくれたり、バドミントンに誘ってくれたりしました。そのおかげで、一人寂しく過ごさず済みました。

対面授業に戻ったのは、3年生が卒業した後でした。日本語の授業は2年生の選択クラスが週に1コマだけという状態でした。そんなとき、他の教科の先生から、1年生対象に文化紹介をしてほしいと頼まれました。できたら食べ物の紹介がいいとリクエストがあったので、焼きそばパン作りをすることにしました。代表的な日本料理とは言えませんが、代表的な購買のパンというイメージが強く、高校生にはうってつけだと思いつきました。また、簡単に作れると思いました。しかし、焼きそばソースと、味の付いていない柔らかいパンが見つからず、いろんな先生に相談しました。現地の材料のことは先生に聞いた方が早く見つかります。それでもイメージしていた長いパンは見



生徒と一緒に作った焼きそばパン

つからず、ロールパンなどで代用しました。当日は昼休みのうちに数人の生徒と事前に焼きそばを調理しておきました。そして、午後の授業で日本の食文化を紹介したあと、自分たちで焼きそばパンを作ってもらいました。それと同時に私が紹介したかったものがあります。それは『マヨネーズ』です。日本のマヨネーズと台湾のマヨネーズは別物なので、生徒たちにも違いを体験してもらおうと考えました。挑戦しない食わず嫌いの生徒もいましたが、美味しいといって食べていた生徒が多かったです。どれだけ生徒たちの記憶に残る文化紹介ができたかは分かりませんが、写真を見せられるだけと実際に体験して（食べて）みるのでは、感じ方が違うと思います。私は日本の素晴らしいところを紹介するというよりは、日本のありのままを紹介できたのではないかと思います。

最後までコロナウイルスの脅威は続きましたが、やりたかった文化紹介などはほとんど出来ました。それもこれも、学校や先生方の協力があってできたことです。私は本当に恵まれた環境で活動ができたと思っています。派遣期間は終わりましたが、これからも日本のこと、そして台湾のことをSNSなどで発信し、日台の架け橋になりたいと思います。

異文化の交差点、台湾で活動して

村井淳一

私達台湾6期13名の活動は、コロナによる入国規制により当初予定から5か月間遅れて2022年2月から始まり、7月初めに5か月間の滞在を終えました。活動期間は短かったものの、全員それを補うべく計画的に、そして積極的に活動し、悔いのない実績を残せたと思います。

私は赴任先である桃園市立壽山高校で、素晴らしい経験をする事が出来ました。赴任期間後半からコロナ感染の拡大で休講が続き、最終的には授業時間の30%が休講やオンライン授業となって授業時間がかかなり不足した状態にもかかわらず、私の当初予定の9割近い文化紹介活動を実施させていただいた上、学校行事である日本語特別クラスの日本語発表会で生徒が発表する原稿文のチェックや翻訳を任せていただけるなど、同校の先生方のご支援には心から感謝いたしております。また地域活動として参加させていただいた社会人日本語クラスの方々からは日本の生活についての質問もたくさんいただき、より深く台湾を理解できたと感じております。

私は日本語学校でベトナムや中国留学生に日本語を教えた経験があり、また過去に台湾には短期の旅行と出張で何度か来たこともありましたが、当初、桃園での活動を開始するにあたり、日本語パートナーズ活動として、日本語の授業にネイティブとして授業に参加することや、日本文化の紹介活動については、まったく戸惑うことはないとし、少し慢心していました。

ところが台湾で生活し始めて驚かされたのは、台湾の習慣が中国とはかなり異なっていて、日本文化が予想を超えて台湾の文化に浸透しているという、過去の短期滞在ではわからなかった台湾の本当の姿でした。たとえば食文化で言えば台湾には現地で作られた蒲鉾、ちくわ、羊羹、大福もちなどがローカル資本のスーパーで一般的に販売されていましたが、日本の伝統のうなぎの蒲焼は地元の店がたくさんありました。さらに今まで代表的な日本文化だと思っていた刺身をワサビと醤油で食べる食習慣は台湾人にかかなり深く根付いる上、学校の授業やクラブ活動では剣道、柔道など

が多く、学校で行われているという具合でした。

その一方、日本と台湾には古くから中国文化が流入しているので、中国由来の日本の行事である節分、桃の節句、端午の節句、七夕、お盆、中秋の名月など、日本と台湾では、形は少し違いますが共通していることも多く、過去の自分の経験をもとに、日本で作って来た日本文化紹介のプレゼンテーションは、台湾ではあたりまえのものとして受け取られそうで、本当に困ってしまいました。そこで考え悩んだ末に日本文化の紹介は体験型の文化紹介を中心に行うこととし、浴衣着付け体験、茶道体験、つまみ細工以外にスポーツチャンバラやおにぎり体験などを生徒に体験してもらうことにしました。そして写真を中心とした日本文化紹介のプレゼンテーションを行う時は、台湾と日本の文化の同じ点と異なる点を対比させて説明するようにしました。

面白かったのは、桃園の高校生は、知識はそれなりに大人びているのですが、手先が不器用な生徒が多くて、おにぎり体験では握ったおにぎりがバラバラに崩壊してしまうものが多かったり、茶道体験では茶筌をうまく使えず、抹茶がまったく泡立たなかったりしたのですが、それが生徒たちにとっては逆に新鮮で、とても面白い体験になっ



おにぎり体験、おにぎり崩壊



茶道体験、茶筴がうまく使えない



恒春城南門 日帝統治時代には鉄道が通っていた

たようでした。

すこし台湾での生活に慣れて来て、人々を知れば知るほど、台湾の歴史について興味が湧いてきました。土日祝日と定期試験の時期は、自由な時

間でしたので、各地の歴史博物館やいろいろなテーマを扱った博物館をできるだけ見て回りました。台南の国立歴史博物館、台北の国立台湾博物館や228記念館などいろいろな情報をつなぎ合わ

せると、台湾は、私が今まで参考にしてきた旅行雑誌の紹介記事通りの、笑顔、温泉、おいしい食べ物、親日、故宮博物館に代表される中華文化というだけではなく、中国などからの移民と、もともと台湾に住む原住民族が、スペイン、オランダ、清朝、日本、そして中華民国の統治という歴史を苦しみながら、そして辛抱強く消化して出来上がった文化を持っていることが見えてきました。そして日本国民として終戦を迎えた台湾の人々が、

食料や原材料の生産基地として植民地経営をした日帝統治時代が終わっても、昔の日本の建物を保存したり使ったりするとともに、日本文化をいまだに台湾の文化として保っていてくれることに対し、深い感謝の念を抱くようになりました。私は、台湾と日本が今後も、苦い歴史も成功した歴史も、穏やかにそして冷静に尊重し、お互いに協力的に発展することを願ってやみません。

日系スタートアップの台湾進出を全力支援！

～「Grow up with Taiwan Program」のご案内～

日本台湾交流協会貿易経済部



日本台湾交流協会では、独立行政法人日本貿易振興機構（JETRO）と連携し、日本のスタートアップ企業による台湾での事業化や台湾を足がかりとした第三国への事業展開を支援する「日台スタートアップ・エコシステム強化事業」を令和2年度から実施しています。

その一環として、台湾最大のアクセラレーターであるGarage+と連携し、今年度からアクセラレーションプログラム「Grow Up with TAIWAN Program」を開始することとなりました。台湾進出に強い意欲のある日本のスタートアップ企業を、Garage+の豊富な支援ノウハウに裏打ちされたきめ細やかな指導で後押ししていきます。関心あるスタートアップ企業の皆様には、以下の概要をご確認のうえ、ふるってご応募をお願い

いたします。

募集対象スタートアップの概要

対象となるスタートアップの条件は以下を予定しています。

- 設立10年以内の日系スタートアップであること。
- 資金調達レベルがSeed～SeriesBであること。
- 台湾企業との連携、資金調達などを通じて事業拡大を目指していること。
- 海外展開について意思決定権をお持ちの方が参加できること。

プログラムの流れ

プログラムの概要は下図のとおりです。

まず、応募いただいたスタートアップ企業の選

考を9月に行います。台湾への進出に意欲的かどうか、そして台湾のスタートアップ・エコシステムにとってもニーズがあるかを基準に、連携アクセラレーターのGarage+とともに審査します。

プログラムでは、まずはオリエンテーションを実施のうえ、台湾のスタートアップ・エコシステムについての紹介を行います。台湾の市場動向や産業情報、資金調達方法、台湾企業との協業可能性、ビジネス展開に係る注意点等を説明します。

その後、Garage+担当者やメンターによる、各社との個別コンサルテーションやメンタリングを行い、各社の台湾進出に向けた戦略を具体的な形にすべく、きめ細かくブラッシュアップしていきます。

本プログラム最大の山場は、台湾における2週間の滞在です。キックオフイベントとして交流会等を実施したうえで、台湾最大のスタートアップ企業の展示会であるMEET TAIPEIに参加します。MEET TAIPEIの会期中には、台湾の大手企業、ベンチャー・キャピタル、投資機関等を対象としたピッチイベントを実施するとともに、各企業のブースを設けて出展する予定です。

最後にMEET TAIPEI後、Garage+の協力の

もと、台湾の大手企業、ベンチャー・キャピタル、投資機関等との1対1のミーティングを実施し、マッチング、ひいては台湾進出が成功するよう支援していきます。

なお、訪台中にはオフィススペースとしてGarage+のコワーキングスペースを提供します。

その他

その他プログラムにかかる詳細については、以下の事業紹介ページにて順次公開予定です。

<https://www.koryu.or.jp/business/trade/startup/>

なお、台湾のスタートアップ・エコシステムについては、以下のページで各種レポートを掲載しておりますので、適宜ご参照下さい。

<https://www.koryu.or.jp/business/trade/report.html>

問い合わせ先

日本台湾交流協会 貿易経済部（皆川、門田、小野）

Tel : 03-5573-2607

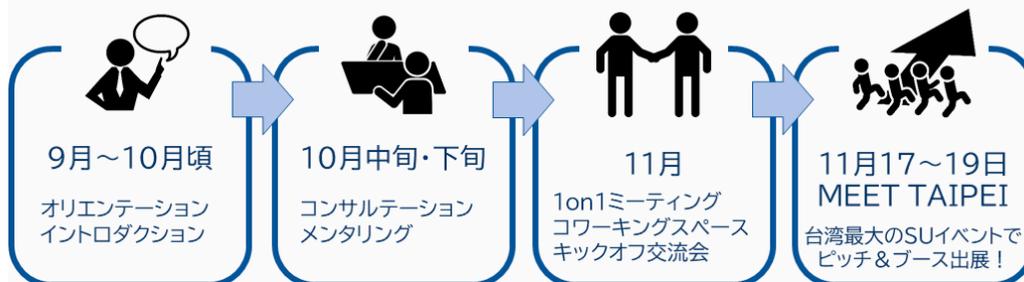
Email : bokei-k1@k1.koryu.or.jp

Grow Up with TAIWAN PROGRAM は

日本台湾交流協会が台湾最大のアクセラレータ Garage+とともに立ち上げた台湾進出を本気で目指す日系スタートアップのためのプログラムです。

豊富な支援ノウハウに裏打ちされたきめ細やかな指導で台湾進出成功を後押しします。

まずは台湾からはじめてみませんか？



日本台湾交流協会事業月間報告

7月	内容	場所
1日	2022年度第1回中等教育機関日本語教師研修会（主催）	オンライン
1日	日本語パートナーズ台湾第6期帰任	
3日	日本語能力試験（森主任）	高雄市
3日～8日	竹久夢二講演会（3日）、展示会（4～8日）（共催）	台北市
5日	日本語専門家派遣事業	新北市（福和中学）
7日	日台パートナーシップ強化セミナー（大阪府、（公財）大阪産業局、TJPOとの共催）	オンライン
8日	2022年度高校生日本語・日本文化体験講座（嘉義）（坂本日本語専門家）	嘉義市
10日	2022年度第1回高校生日本語・日本文化体験講座（主催）	基隆市（多目的イベントホール）
11日～13日	安倍元総理弔問記帳	高雄市（交流協会高雄事務所）
11日～17日	故・安倍元総理の弔問記帳	台北市（台北事務所地下1階文化ホール）
15日	日台パートナーシップ強化セミナー（北海道、札幌市、ジェトロ北海道、TJPOとの共催）	北海道（ハイブリッド）
16日	日本留学フェア2022（名義、森主任、蔡職員、蘇職員）	高雄市（高雄国際会議中心）
17日	2022年度日本留学フェア（後援名義）	台北市（台北世界貿易中心）
18日	ラジオ番組「21世紀の台湾と日本～台湾ロスを癒やそう！台湾満喫ラジオ」（後援）	東京（ラジオ放送）
18日	日本台湾交流協会日本留学奨学金（学部）合格者説明会	オンライン
21日	領事出張サービス	台南市
22日	2022年度第1回日本語教育研修会（主催）	オンライン
27日	日本語専門家派遣事業（坂本日本語専門家） 講義：「料理と日本語教育」（学内教員研修）	高雄市（樹人医護管理専科学校）
28日	新竹市領事出張サービス	新竹市新住民家庭センター
29日	「日本人形展」（海外巡回展）開幕式・和太鼓公演（共催）	新北市（鶯歌陶器博物館）
29日	台日文化経済協会70周年記念イベント（泉代表出席・挨拶）	台北市（台日文化経済協会）
29～31日	台湾フェスタ2022（後援）東京	東京
29日	『永遠の農業人―李登輝と台湾農業』新書発表会（村嶋広報文化部長出席・挨拶）	台北市（市長官邸芸文サロン）
30日	文化講座「鳴子こけし絵付け体験」（共催）	新北市（鶯歌陶器博物館）

2022年度第1回高校生日本語・日本文化体験講座（主催）

2022年7月10日（日）、基隆市で日本語を学ぶ高校生を対象とした日本語・日本文化体験講座を実施しました。16名の学生が参加し、日本語での自己紹介にチャレンジしたり、浴衣着付けを体験したりしました。高校で日本語を教える先生方や日本人ボランティアの方々にもご協力いただき、参加者からは「色々な人に出会えて楽しかった」「またこんな活動に参加したい」等の声が寄せられました。



